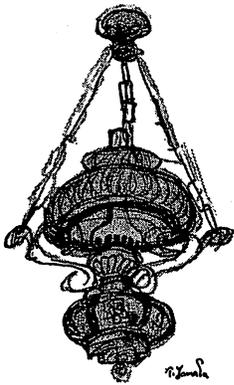


細胞診指導医会 会報

No.3 May 1990



国際細胞学会あれこれ

独協医科大学 外科学
信田重光

国際細胞学会 International Congress of Cytology は国際細胞学アカデミー International Academy of Cytology (IAC) の3年に一度ずつの国際的学術集会である。

IAC は1957年 Brussels で創立され、その第1回学術集会がウィーンで行われたのは、1962年(昭和37年)で、このときは日本からは水野潤二教授が出席され、その報告を第1回日本臨床細胞学会でされた。そして、3年に一度ずつ国際会議を行うことになった由で、この会には在米の益川先生、在フィンランドの坂井義太郎先生も出席されたと水野教授が学会誌1巻1号に記載されている。

第2回の昭和40年(1965年)のパリの学会はユネスコホールで5月21日から23日までの3日間行われた。日本からは増淵一正先生および癌研婦人科の藤井純一先生や、水野潤二教授、渡辺義男教授および順天堂大学外科から小生、沢田好明、滝田照二君、また野田定先生、高橋正宜先生、石東義男先生そして現地で当時ロンドン留学中の山田番先生、在スイスの坂井義太郎先生ご夫妻、そしてアメリカ在住の益川先生などが参加された。これには小生はファイバースコープによる胃早期癌の細胞診を、山田先生が洗滌法による胃癌細胞診の発表を

し、その他日本からの発表は計6題とのことであった。

当時学会場で日本人計13名で撮った写真があるが、諸先生方(小生や山田先生はあまり変わらないが)の髪が黒く、またフサフサとしておられるのに時の流れを感じさせられる。今から25年前のことである。この写真のシャッターを切ってくれた人が、“Are they Chinese, Philippino, Korean, Vietnamese or Japanese?”と小生に聞いたのには、当時世界を知らない小生は驚かされた。たしかに当時の日本人の国際的地位はこの順序どおりであったのであろう。

Official Banquet はベルサイユ宮殿とのことで、増淵先生や水野先生はタキシードで出かけられたが、われわれ貧乏医局員はむしろ夜のパリの町の探訪を楽しんだ覚えがある。

第3回はブラジルのリオ・デ・ジャネイロで昭和43年5月19日から22日まで行われた。このときは増淵先生を団長に、水野潤二先生と樫木勇先生(当時米国に留学中)、恩師福田保先生、村上忠重先生にわれわれ若手が参加し、総計24日間の旅程が組まれ、多くの先生が羽田を出てサンフランシスコ(1泊)、ニューヨーク(3泊)、リオ(6泊)、学会終了後ブエノス・アイレス(1泊)、サンチャゴ(2泊)、リマ(2泊)、メキシコ・

シティー（2泊）、アカプルコ（2泊）、ハワイ（2泊）から帰国の旅行をごいっしょさせていただいた。

リオでは綿貫重雄教授（当時千葉大学第1外科）、奥井勝二先生（現教授）、藤森正雄先生（当時群馬大学外科教授）などが合流された。ニューヨークでは Mount Sinai Memorial Hospital に Dr. Koss を訪れたり、ブエノスでは Papanicolaou Cytology Institute, その他、増淵先生のご案内で多くの大学を見学させていただき、アカプルコでの死の飛び込み、アカプルコヒルトンホテルのプールサイドでのひとときなど思い出が多い。印牧義孝先生（沼津市）が“セルベッサ！”を連呼してボーイを呼んでおられた姿が目につく。

第4回はロンドンで昭和46年（1971年）5月24日から27日までであった。Banquet は Lancaster House という宮殿で、厚生大臣の招待で、建物内の調度品や絵画の豪華さに、さすが英国と思った。

学会終了後、増淵先生を団長にスペイン、アフリカの旅行に行った。水野先生、福田先生のご常連に、東北大学山形敏一教授、石岡国春先生、山形 淳先生（山形先生ご長男）にわれわれが加わって総勢15~16名くらいであったが、楽しい旅行であった。マドリッドの闘牛場で牛が観客席に飛び込み、怪我人が出たこと、ナイロビ郊外のゴルフ場に増淵先生が福田先生をご案内され、日本から来た最高年齢のプレイヤー（先生当時79歳）ということでゴルフフィーが無料になったこと、ツリートップホテルで象がハルンをするときの光景などはその後しばらくのあいだ話の種になった。

第5回がマイアミで昭和49年（1974年）5月29日から6月1日までホテル・アメリカナで行われ、この頃から日本人の参加者が増えてき、たしか参加者のトップが、もちろん地元のアメリカで2番目が日本人となった由で、日本からの出題数も増加した。このとき、小生が消化器癌の早期診断のコンgresレクチャーを担当した。毎日夕方、学会が終わってからホテルの裏の海で泳ぐのが楽しみで、夕方になると海の水が暖かくてさすが赤道近くの感じがした。このときの会長がマイアミ大学の Prof. Anderson で、福田先生は肝硬変で腹水が貯留しておられたが、これが最後だからと、先生の長女のおよびカナダの高校に留学していたお孫さんが付き添われ学会中お具合の良いときはいつも最前列で発表を聞いておられた。ドラッグストアでラシツスを買って差し上げたら、“利尿剤は良くききますね”と感心しておら

れた。学会終了後はニューヨーク、ロスアンゼルス、ハワイとご親戚を先生がお訪ねするのにお伴して、日本に帰国後3週間目に食道静脈瘤破裂で吐血され、7月14日に逝去された。恩師の最後の外国旅行として、小生にはきわめて思い出深い。

第6回が増淵先生の会長で東京ニューオータニで昭和52年（1977年）5月1日から5日まで行われた。参加者は1,400名近く、外国からは532名とのことで、その当時この学会としては最高的人数であった。Banquet ときの三浦布美子の舞踊と唄は今でもヨーロッパの仲間達のあいだでは語り草になっている。この会で増淵先生が国際細胞学会賞 Maurice Goldblatt Cytology Award を授与された。

第7回がミュンヘンで昭和55年（1980年）5月19日から22日までであった。ドイツらしく種々の行事も質素であったので、前回の東京学会のときのような活気が少なく、ドイツ以外の出席者からは東京学会をなつかしむ声をずいぶん聞かされた。日本からは医師会員のみならず技師会員の出席も多く、国別の出席者中第1位はアメリカでわが国は第2位であった。この頃から学会が盛会になるか否かは日本からの出席者数によるといわれるようになった。

第8回は昭和58年（1983年）モントリオール市で6月20日から23日までの4日間行われた。日本からは技師会員も多く出席し、学会参加者中、日本人第2位の実績が定着した。この会で不肖小生が Maurice Goldblatt Cytology Award を授与された。帰途滝 一郎先生方とカナディアン・ロッキーの観光に出た。自然の作り出す山々の雄大さ、氷河の壮大さ、湖水の美しさに目を見張った。当時小生は大学病院長であったため、長居ができずロッキー山脈横断鉄道による溪谷美の観光はせずに、飛行機で山越えて帰国してしまった。惜しい気持ちが今でも残っていて、いずれ機会をみてもう一度訪れてみたいと思っている。

第9回は昭和61年（1986年）ベルギーブリュッセル市で5月26日より29日まで行われた。この学会の直前、ソビエトのチェルノブイリの原発工場の事故があり、アメリカからの参加者が少なく、日本人が最も多い学会となり、この学会が成功したのは日本人が多数参加してくれたからだ。Prof. Wied や Prof. Meisels からいわれたのを覚えている。この会で水野潤二先生と田中昇先生が Goldblatt 賞を、また技師の南雲サチ子さんが

技師賞を授賞された。技師賞はこれ以前に平田守男氏、池田栄雄氏、山岸紀美江さんが授賞されている。この会までは増淵、水野両先生ともお元気で皆勤でいらっしやったが、水野先生は昨年逝去された。ご冥福を心よりお祈りする次第である。

第10回は昨年平成元年（1989年）5月15日より18日までアルゼンチンのブエノス・アイレス市で行われた。南米で行われることについては、いろいろと問題があったらしいが、会長の Dra. Peluffo が前年奥井勝二教授会長の日本臨床細胞学会総会に PR にこられたためか、日本人の参加者は120名で全体1,200名の10%近く、やはり地元のアルゼンチンが270名で日本人が第2位でありアメリカからの参加者が少なかったのは、政治の裏表のためかと思った。このうち日本からの出題は一般演題146題中35題、ポスター47題中17題で、一つの

国としては最高であった。アスタマニアーナ（あしたまにあわ〜な）といわれる南米の学会としてはまことに整々として立派な学会運営であったが、会場から出した荷物や、送ってもらう約束をした写真がとうとう届かなかったことなど裏側としては問題があったようである。

次回第11回はオーストラリアで Dr. Drake が主催される。

以上、これまでの国際細胞学会のあれこれを簡単に述べたが、お蔭様で小生第2回から昨年まで皆勤で、楽しい思い出を残させてもらった。つくづく小生の今日あるのはこの学会のお蔭と思っている次第である。

（編集委員会から原稿を依頼されたのが5月10日で思いつくままに書き走らせたので、多少の不備はご勘弁いただきたい）



細胞検査士資格認定試験の初期のこと



I. 背景と資料

昭和40年頃、日本臨床病理学会の小酒井 望会長に対し日本母性保護協会の森山 豊会長より、母性を痛から救うため訓練された細胞診技師の早急の育成が要請されたということで臨床病理学会からは田中 昇試験実行委員長が、日本臨床細胞学会増淵一正常任理事と協議しつつ細胞診スクリーナー養成講習会を、まず第1回は臨床病理学会関東支部主催の形で昭和41年5月開催した。それ以後は日赤中央(田中 昇)、国立がんセンター(田嶋基男)、鉄道中央(高橋正宜)で実習を中心とする研修コースが行われていた。またスクリーナー認定試験を開始すべきであるとの声も強くなっていたので41年1月、42年2月には両学会関係者の会合が持たれた。43年4月からは癌研究会と大阪府成人病センターで6ヵ月コース研修が始まり、これら卒業者と従来からの細胞診に従事する技師の資格認定試験を行いスクリーナーを制度化すること、細胞診指導医制度の制定とが、昭和43年6月第9回臨床細胞学会(東京)で承認された(会則第2章第3条4.と第7章指導医認定の項新設)。この件は同年10月第15回臨床病理学会総会(仙台)でも承認された。

第1回の細胞検査士資格認定試験準備委員会は昭和43年11月で、試験の期日、実施要領、試験委員と主任の内定、指導医の性格などを協議しほぼ原案通り可決した。原案は同年2月21日(本郷学士会館)に試験制定に関する懇談会(発起人代表は田中 昇臨床病理学会試験実行委員長)でまとまっていたものである。この準備委員会の委員は次の17名で構成されていた。

世話人：田中 昇(日赤中央)、天神美夫(杏雲堂)。臨床病理学会側：小酒井 望(総務幹事)、緒方富雄(試験委員長)、日野志郎(幹事、東京逓信)、橋本敬祐(幹事、順大)。臨床細胞学会側：増淵一正(常任理事)、水

順天堂大学名誉教授 橋本敬祐
関東労災病院顧問

野潤二(理事、関西医大)、服部正次(理事、大阪成人病)、藤井純一(理事、癌研)、信田重光(理事、順大)、石東嘉男(理事、厚生中央)、松田 実(理事、大阪成人病)。両学会所属：大橋成一(国立東一)、高橋正宜(中央鉄道)、田嶋基男(がんセンター)、金子 仁(国立東一)。

以上の準備委員会の申し合わせに基づき橋本敬祐が主任試験委員を委嘱された(昭和43年12月)。委嘱者は、日本臨床病理学会会長 橋本寛敏、同学会試験委員長 緒方富雄となっている。第1回試験は44年3月10、11日。受験者は推薦による8名。試験委員は田嶋基男(病理)、高橋正宜(病理)、信田重光(外科、消化器)、多賀須幸男(内科、消化器)、服部正次、松田 実(内科、呼吸器)、天神美夫、藤井純一、石東嘉男(婦人科)、川井一男、柴田偉雄、金子 仁、田中 昇、橋本敬祐(いずれも病理)の14名で、受験者より委員が多いのは試験助手を用いないためである。第2回試験は第1回の合格者8名を助手とし、委員には坂井義太郎(都立広尾病理)、山田 喬(がんセンター病理)の両氏が加わり服部氏は退任された。第2回の試験実施は同44年8月15~17日(金、土、日)。受験136名、筆記、スライド合格者92名に手技、スクリーニング、同定、少数細胞、面接を100分ずつ割当てて、遠距離の60名は土曜、東京近在の32名は日曜に実施した。実技平均点は 72.2 ± 1.6 で一峰性度数分布曲線となった。多項目多数個のcheck pointsを設けるならば主観の入りやすい形態学でも判定の客観性は保証されるという、筆者らが過去10余年にわたり経験してきた病理の技術認定試験(臨床病理学会主催)を想い合わせひとまず安心した。もう一つその後の試験実施中も絶えず感じていたことは当初の8名と第3回以降に加わった助手も含めて、この人達の能力の高さと真摯な姿勢である。助手グループの周到着実な協力が試験を成功に導いた大きな要因であったといえる。筆者は第

13回（昭和55年）まで主任委員であったが（会場も順天堂大学）、第13回の受験者は446名、委員55名（婦人科18、病理16、消化器10、呼吸器5、その他5）、助手37名、実技受験者242名、平均点 75.4 ± 5.7 であった。第10回（昭和52年）以降の試験については昭和51年10月より臨床病理同学院（緒方富雄院長）が発足し臨床病理学会試験委員会の仕事を全部引き継ぐことになったので、まず三団体協議会を開いた。臨床細胞学会：天神美夫、栗原操寿、久保久光、臨床病理学会：河合忠、富田仁、橋本敬祐、臨床病理同学院：内海邦輔、田中昇、金子仁、の間で昭和52年3月30日および同年6月27日に協議した結果、今後は臨床病理学会、臨床細胞学会および同学院3者の共催で実施することが申し合わされた。その内容は

1. 第10回についても例年同様の試験を実施するため上記3者が協力する。
2. 募集要領に3団体名を記入。
3. 認定証署名順序は主任試験委員、同学院院長（合格認定）、臨床病理、臨床細胞の両学会長（資格認定）とする。
4. 試験委員は3団体より任命。
5. 年間スケジュールなどは1月の合同試験委員会に報告。
6. 受験料は現行（1万円）に据置く。

などであった。同年7月15日開催の第10回細胞検査士資格認定試験準備委員会において天神美夫委員より以上の点につき報告があり了承された。第10回以降はこのような形で実施され、その思想はその後受け継がれて今日に至っていると筆者は理解している。

II. 個人的想い出

とにかく悪性細胞の見落しのないスクリーナーのみを合格させることが目標であったから、ガラス・スライドをman-to-manでみて判定という点に重きがおかれた。これを数百人の受験者に長期間一定レベルで適用するにはそれなりの工夫が必要となる。組織のパラフィンブロックでも1枚毎の少差はあるが細胞診では1枚ずつの違いが大きいし褪色もある。そのほかにも年ごとのバラツキ要因は多いので及落判定基準を毎年一定基準範囲内に収めることは必ずしも容易ではない。ただし安全率を過大にとって受験者数を押え込めば話は簡単だが受ける側からみれば少し荒っぽいというべきであるから、そのよ

うな話は出ていない。筆者の考えでは名目的及落点数の固守（学校内の試験のような）は真の基準値の維持とは必ずしも一致しないということであったが、この点につき大論争が起こり、いまだ本当の結論は出ていないかと思う。

さしあたって初期には用手計算、第9回以降は、団野誠委員作成のプログラムで富士通230などを用い最小二乗法の誤差計算を適用した。通称 $(\bar{x}-1/3\sigma)$ 操作法がこれで偶然か毎年この値がほぼ同様のところに集中した。少しズレ込んだ年は調べると必ずどこかに難易度の偏りが発見された。筆者は以前より病理組織のmorphometryを手がけており、確率、統計的センスからこのような操作は不自然とは思わなかったが、たとえ微調整であっても及落点を動かすということについては一部の委員の方から強い反対意見が出てしばしば苦戦におちいった。筆者には一つの認識があり、当時の受験者をおよそ近似的には単一母集団と考えてよいだろうということであった。これは当時の指導医の方々の精力的な日常活動の中で教育も行き届いている事情と関係していた。それは開拓者の努力の自然の成り行きではあるが、場合によっては閉鎖集団的とみられる可能性も蔵していたかも知れない。筆者は種々の条件を考慮したうえで、主任委員在任中は指導医はとらないと称していた（本当をいえば取れなかったのだが）。通信事務などは当初より臨床病理学会の試験事務所（昭和51年以降は臨床病理同学院事務所）の石井敦子氏が正確に処理しているが、試験の内容にふれる会合用書類は筆者が独りでガリ版を切った。今から考えればバカなと一笑に付されることでも物事の始まりというのはそんなものではないかと思う。

筆者は国立東一病理に勤務中昭和26年から細胞診を始めており論文をいくつか出していたが、院外の婦人科医中心のグループとの接触はなかった。しかし臨床病理学会の設立当初より幹事であり、その学会の実技認定試験と検査技師国家試験には最初から委員であったから、実技判定の困難は熟知していたつもりである。幸いにそれぞれ立場を異にする多くの人々の協力に基づいて細胞検査士の試験が世界のどこに出しても第一級となった。今、昔のことはいわない方がよいことは肌身にしみている。しかし利害を無視してひたすら完全な資格認定試験を完成させることが、よきパートナーを得、よき後継者を得る最善の道であると、医師も技師も一つになっていた当初のことだけは、献身的に協力をして無言のまま去

った人達のためにもと思い、書かせていただいた。

付記：以上は筆者の手許の書類によったため記述に誤りや偏りが無いとはいえない。もしお気づきの点があれば

ばご教示いただくなり、投書の形で訂正していただければ幸いと考える。

細胞診と私



産婦人科医院開業（土浦市）
鈴村博一

私が細胞診と出会ったのは昭和44年に癌研の婦人科に勤務してからでした。それまで千葉大学の病理学教室で故滝沢近次郎教授のもとで臨床病理を4年間勉強しておりましたが、病理では当時細胞診は全く行っておりませんでした。千葉大学の産婦人科では故御園生雄三教授の下で武田敏先生が細胞診をしていたようですが私は全く無縁でありました。

癌研に勤務すると驚くほど多数の上皮内癌や初期癌の患者がおりましたが、私の臨床医学の恩師である増淵一正先生にその発見のための細胞診の重要性を教えていただいたことが、私を細胞診の道に進ませるきっかけとなりました。当時癌研には増淵先生のもと、天神美夫先生、鈴木忠雄先生、故久保久光先生、故藤井純一先生（天神先生は私と入れ違いに杏雲堂病院婦人科に赴任）と4人の細胞診の大家がおられました。私が初めて細胞診の講義を受けたのは細胞診断部技師長の山崎氏でした。彼が教えてくれた事が記載されているノートは今でも大切に保存してあり、ときどき取り出してみます。ノートの第1頁に表層細胞、中層細胞、旁基底細胞のシェーマが画かれているのです。本当に初歩の初歩から教えていただいた訳です。山崎技師長はまさに細胞診の鬼ともいべき人で、夜、婦人科の医局でビールを飲みながらプロレスのテレビを観ること以外は細胞診をしていたらしく、彼の使用していた顕微鏡の微動調節のノブや標本移動用のノブの切れ込みが消失し、ツルツルに光っていたのにはびっくりさせられました。私も病理時代からの顕微鏡を今でも使用していますが、20数年経った

今でもノブはざらざらのまま、今だに山崎氏の域に達せずと、思い出すたびに感じております。

天神先生には、ときどき夜細胞診室にいらしたとき教えていただいたのですが、細胞診を始める苦労話をよく聞かされました。何の教科書もない時代に英語の文献で探してきて、薬品をそろえ、米軍の基地に行ってその意味を教えてもらったことなど、私を含め今の人達には想像もできないほどの苦労をして細胞診を実用化してきた努力にはただただ驚くばかりでした。鈴木忠雄先生が日産婦の宿題報告で子宮体癌の基礎と臨床をされたのもその時代で、あれほど多数の体癌標本をみる事ができたのも幸せでしたし、十蔵寺新先生が、アメリカから帰国され、初めてヘルペスの標本をみせていただけたことも鮮明な記憶として残っているなど、私がいろいろな先生方から細胞診を教えていただいた時代がこれまでで一番楽しい時代でした。

昭和48年に指導医の資格を受け、癌研の細胞診を判定するようになったのですが、教えていただいていたときとは違って自分で最終判定するむずかしさをいろいろと経験させられました。また、当時は国立がんセンターや東京都癌検診センター、杏雲堂病院などで夜、勉強会が開かれ、いろいろな大学の先生方と意見の交換をし合ったこともなつかしい思い出で、そのお陰でたくさんの先生方と知り合え、多くの仲間もできましたことは私の一生を通じての宝物と細胞診に感謝しております。

昭和53年に癌研を辞して茨城県土浦市で産婦人科を開業しましたが、今でも細胞診は自分で染色し判定して

おります。夜、外来が終わってから鏡検し、大多数の陰性に混じって陽性を発見したときのうれしさとか驚きとか、その気持はスクリーニングをした人でなければ味わえないものです。公的には茨城県総合健診協会での集検標本の判定の他、数カ所の公的病院、施設の細胞診を指導しておりますが、みせていただく標本の1枚1枚が、新たな勉強であり、自分の臨床にも大変役立っております。

茨城県にはこれまで日本臨床細胞学会の理事がおりませんでしたので、私のごとき一開業医が茨城県支部長をしておりました。支部発足にあたっては指導医や公認スクリーナーが少ないため会誌の発行や学術集会の運営など、いろいろと多数の会員をかかえる他支部にはない苦労がありました。何とか会員諸氏の努力により、つつ

がなくやっまいりました。本年度から東北大学より石岡国春先生が水戸に赴任されていらしたため、細胞学会理事が支部長になられ、やっど他県と肩を並べることができたとほっとしております。

茨城県では大都市部と違って指導医の大部分が開業医です。特に産婦人科の開業は分娩を取り扱うため時間的制約があり、指導医会にもなかなか顔を出せません。また、リサーチや論文も思うようではなく、指導医の更新にクレジット制が導入されたことは当然のこととは思いますが、われわれ開業医では将来更新できなくなることもあるのではと話し合っております。

しかしそのときはそのときで、それまでは苦しみながらも楽しく臨床に役立つ細胞診を続けていこうと考えながら鏡検を続けている毎日です。



編 集 後 記

いずれの分野でも、物事でも、始まりがあり、その歴史がある。そして、時がたつにつれて、昔の重みが増してくるものである。

わが国での細胞診断学、日本臨床細胞学会、指導医制度なども、今のうちにその歴史を語り、記載しておかないと、その始まりや、発展の次第がぼんやりとしてしまうほどに、誕生は昔のことになってきている。

本会報の発行にあたって、その当初の編集方針の第一に当学会や、指導医会の沿革について、当時苦勞された方々に語っていただくことをあげたのは、正に時宜をえたものであろう。初号、2号と進み、本号では、信田重光先生には本学会と国際細胞学会との関わりの歴史、橋本敬祐先生には、先生が発足当初から苦勞された“細胞検査士資格認定試験”の初期のくわしい歴史についての玉稿をいただくことができた。ここに述べられていることの大部分について、大方の指導医会会員諸子、また現在の試験委員でも、おおよその方々にはご存じないことばかりであろう。まさに歴史の重みである。

また、鈴木博一先生のお話は、前々号、前号の印牧、永井両先生のお話とともに、指導医制度の側面の歴史、いわば外史を語る玉稿であり、会員各位も興味深く感ぜられるに違いない。今後も続けたい企画である。

この春、指導医の数は約千人に達し、指導医のより活発な活動と結束が求められている。したがって、本会報の役割はさらに重要になるであろう。今後は、編集方針に会員相互の密な連絡、情報の交換などを取りあげ、幅広い原稿の依頼、紙面の許す限り“自由な投稿欄”などの設置を行っていきたいということで編集委員会の意見がほぼ一致している。会員各位のご協力をお願いする次第である。

(5月10日、突然の真夏の陽気の中、編集委員会で……垣花昌彦)



会報編集委員会

委員長：山田 喬

委員：藤井 雅彦，垣花 昌彦，野澤 志朗，上井 良夫